

読書への誘い

< 第Ⅲ期 第 25 号 > 通巻 1 2 0 号

12月も下旬に入りました。今年は12月に入っても雪が舞うこともないですが、朝夕の空気は凜として、月や星の光は冴え冴えと、冬の本領発揮です。今年一年を振り返り、そして新たな年に思いを馳せながら、明けの明星を眺めてみませんか？

夕づつを見て

きよく
かがやかに
たかく
ただひとりに
なんじ
星のごとく

佐藤 春夫

(詩集『佐藤春夫詩集』第一書房・1926年刊)

『僕の叔父さん 網野善彦』(中沢新一著・集英社新書・2004年刊)

日本の歴史学に新たな視点を取り入れ、中世の意味を大きく転換させた偉大な歴史学者・網野善彦が逝った。数多くの追悼文の中で、ひとときわ精彩を放つ宗教学者・中沢新一の文章。それは、網野善彦が中沢の父の妹の夫という関係だけでなく、中沢の幼い頃から濃密な時間を共有してきたからだ。それは学問であり人生であり、ついには友情でもあった。切ないほどの愛を込めて綴る「僕と叔父さん」の物語。

網野善彦は、私の叔父にあたる人であった。正確に言うと、私の父親であった中沢^{あつし}厚の妹にあたる真知子叔母の結婚した相手が、当時はまだ駆け出しの歴史学者だった網野さんだったのである。二人は洪澤敬三の主宰していた常民文化研究所で知り合ったのだ、と聞かされていた。「レンアイケッコン」という言葉が、何度もみんなの口から出てきていた。その言葉が口口にされるたびに、あたりに甘い香りが漂ってくるのを、まだ幼い私でも感じる事ができた。

祖父が早く亡くなってしまっていたために、父の兄弟たちは真知子叔母のことを父親がわりになって、かわいがっていた。そのかわいい妹が、少し遅咲きだったが結婚するのである。とりわけ私の父などは民俗学の研究をしていたから、常民文化研究所の動向には並々ならぬ関心を寄せていて、そこの仕事のお手伝いに入った妹が、同じ山梨県出身で、中世の荘園や漁業史の古文書に埋もれながら研究生活を送っている網野さんと結ばれたことが、よほどうれしかったとみえて、二人がは

じめて山梨の実家に挨拶にやって来る日の朝などは、めずらしく私におめかしをさせたあと、いそいそと一人で駅へ迎えに出かけていった。

私はといえば、さわやかな初夏の朝なのに、気分はまったく沈んでいた。あれは1955年の5月のことだったから、私はもうすぐ五歳だった。ひどく顔見知りをする性格で、対人恐怖症の気味もあった。他人が自分に視線を送っているのに気づくと、もうそれだけで頭に血がのぼって、顔が真っ赤になってしまうのである。どちらかというと、一人で遊んでいる方が好きだった。だから初対面の人などはまっぴらごめんな気持ちだった。

それなのに、私は東京のいとこのお古のビロードの上着を着せられて、玄関先に座って、叔母さんの結婚相手を笑顔で迎えなければならないのだ。祖母たちは、先方は井ノ上村の網野銀行のご子息で、とても上品な方なのである、だからいつものような品の悪いおちゃらかしを言うものではない、と特に私には厳重に言い含められていた。まったくこんな気分のいい朝に、迷惑なお客さまだこと。私は内心むくれていた。

十分ほどして、父親が上機嫌で戻ってきた。そのあとから、ちょっと恥ずかしそうにしながら、叔母が入ってきた。それから大きな黒いかばんを手に提げた、異様に背の高い若い男の人が、少し緊張した顔つきをしながら入ってきた。まずいことにその瞬間、私はその男の人とばっちり視線が合ってしまったのだ。しかし、不思議なことに私は狼狽して真っ赤になったりしなかった。それよりも、その男の人の大きいことにびっくりしてしまったのである。

私は挨拶もそこそこに、急いで母親の背中に隠れて、その耳元にこうささやいた。「あの人はアメリカ人?」。それを聞いてみんなが笑った。

「こちらが網野さんよ」と叔母から紹介されたその人は、背丈が立派であるばかりではなく、とても鼻が高く、ハンサムだった。だから私はてっきりアメリカ兵だと思ってしまったのである。その頃はまだ、ジープに乗って田舎道を走り抜けていくアメリカ兵の姿を見かけることがときどきあった。彼らはとても体格がよく、すっきりと高い鼻筋をしていた。私は内心ひそかに、アメリカ兵たちにあこがれの気持ちを抱いていた。だから、はじめて自分の前にあらわれた網野さんを見たときに、すわっGIの出現かと勘違いした私の気持ちには、どこかあこがれの対象を見るような感情が含まれていたのだと、今になっては思う。

初対面にもかかわらず、網野さんと私はすぐに仲良しになった。深い井戸の底から響いてくるような上品な声も好きだったし、大きな目玉をギョロギョロさせながら、子どもたちの遊びを興味深げに眺めている、優しい姿も好きだった。…

この最初の出会いの日から、私と網野さんは、人類学で言うところの「叔父一甥」の間に形成されるべき、典型的な「冗談関係」を取り結ぶことになったわけである。この関係の中からは、権威の押しつけや義務や強制は発生しにくいというのが、人類学の法則だ。そして、精神の自由なつながりの中から、重要な価値の伝達されることがしばしばおこる。こうしてそれ以来四十数年ものあいだ、私たちのあいだには何よりも自由で、いっさいの強制がない、友愛のこもった関係が持続することになった。

私は自分をマルセル・モースに比較するほどの凶々しさは持ち合わせないが、それでも、叔父である偉大な社会学者エミール・デュルケムに対する甥モースの、尊敬に満ちた、しかしそれでいてどこまでも自由な感覚に満たされた関係から生まれる感情によく似たものを、この叔父にずっと抱き続けてきたことは確かだ。その友愛の感情のいかに深く、いかに得難いものであったかを、こうしてその叔父を失った今、空の青さのように痛感する。自分の人生におこった網野さんとの奇跡のような出会いを意味を考えると、因縁の靈妙さに強く打たれるのである。

(p.10-15)

